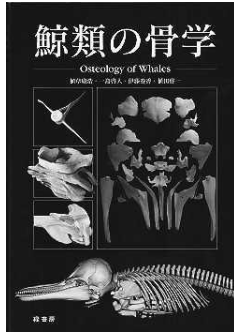


◆本の紹介◆

『鯨類の骨学』

植草康浩・一島啓人・伊藤春香・植田啓一 著
2019年2月8日発行, A4版, 152頁.
6,000円(税別), 緑書房, ISBN-10: 4895313654,
ISBN-13: 978-4895313650



評者にとってクジラの骨は苦手であった。たいていの動物の骨、とくに頭骨については、その分類の所属がわからなくても、骨そのものの形状と構成はある程度は判別がつくものである。しかしクジラの頭骨は一般哺乳類の様式から大きく変形しており、容易に理解ができないことが、近寄りがたい理由であった。

本書は、この曲者の骨を正面から解き明かしている。ハクジラとヒゲクジラの特異性を比較検討し、特殊化の著しいマッコウクジラ類を含む、おおくの種を扱っており、多様な鯨類の骨に十分に対応しているといえよう。

本書には多くの工夫がなされている。まず図版が大きく、標本との対応がとりやすいし、実物標本がなくとも本書だけで一定の理解が出来るようになっている。また基本的に見開きの頁で、一つのテーマが完結するようになっているのも便利だ。

著者陣は医師、鯨類古生物学者、現生鯨類学者、獣医師からなり、骨学にとどまらず、鯨類の古生物学、進化系統、ハクジラの発声器、骨の計測基準、画像診断法が取り上げられており、幅広く鯨類の理解と研究、さらには病気の診断への実用性をも持ち合わせている。なかでも化石として単独で産出することのおおい耳の骨については、詳細な解説がなされているのは特筆すべき点であろう。

執筆の動機となったのは、著者たちがクジラの研究に際して標準となる教科書がなかったことの苦労があるという。したがって本書の基本的なスタンスは、これからクジラを研究しようとする人が直面するであろう問題を、つねに念頭において執筆されているのが特徴である。しかしその反面で、執筆者の個人的な研究の関心部分にこだわりすぎるきらいがある。この点は本書の特徴になってもいるが、いささか煩わしいところもある。

鯨類化石は日本列島の多様な年代の各地から産出しており、今後の研究がおおいに期待される。また、みごとに海洋適応した鯨類の生物学的な機構の解明もすすめられることであろう。本書は、これらの鯨類研究の基礎となる骨学に欠かせない本となるだろう。

(小寺春人)